いまだありやといひ給ふに、侍よしきこえて、やがてむかしの棲へみちびきたてまつりつ、枕さだめしぬやのかたにおはしたれば、よろづむかしにかはらず、女君は木丁のかたびらにはたかくれてゐたまへり、略○中かたはらに五六ばかりなる女君の、えもいはずうつくしきぞゐ給へる、たれならんと心えがたくて、いかなる人のなごりにてかとひ給へども、いらへ給事はなくて、いとゞ涙の色はまさり行ば、いとあやしくおぼして、あるじのをとこに、かれはたれにかとたづね給ふに、ひとゝせみえたてまつり給てのち、たゞならずなり給て、いでぬべかなりと申に、このよひとつならぬ御ちぎり、いとあはれにおぼさる、略○中この家あるじは、このこほりの大領宮道の彌益となんいひける、こよひもかりのやどりにたびねし給て、むつごともつきなくに明ぬれば、明日となんちぎりて宮こへかへり給ひぬ、あくる日になりにければ、略○中都より御むかへにまゐれり、八葉の御車に侍二人ばかり雜色などさるべきさまにぞありける、このたびは空だのめにはあらざりけりとはおぼしながら、我身のほどをおぼし去りて、行すゑいかならんとあやふき心ちし給へども、むなしくかへし給べきならねば、みやこへはくれかゝる程をはからひてぞいで給ける、略○中むかへとり給てのちは、かひ〳〵しくもしほのけぶり一すぢになびきて、ことうらにかゝる御心なくてすぐし給ひけり、かくてふたゞゝろなくて、年月をおくり給ほどに、うちつゞきをのこ君ふたところいでき給にけり、ありしひと夜のちぎりにいでき給へりし女ぎみは、宇多院の位におはしましける時に入内ありて、皇太后宮胤子と申、皇子いでき給にければ、高藤の公は朝家に又なき權臣にて、内大臣になり給ひにけり、皇子踐祚ありて、延喜の聖の御門○醍醐とぞ申なる、我朝の賢王におはします、帝祖になり給にければ、うせ給てのちは太政大臣正一位を贈せらる、二人のをのこ君と申は、泉の大將定國、三條右大臣定方これ也、いづれも才卿にて、天下におもき人にてなんおはしける、延喜の聖主ことに律令にあきらかに、格式をさだ